メマンチンによって行動心理症状の改善を認めた前頭側頭葉型認知症の２例

百渓　さゆり、南　博也、豊田　勝孝、金沢　徹文

大阪医科薬科大学　神経精神医学教室

前頭側頭葉変性症の 1 つである（行動障害型）前頭側頭葉型認知症(以下、FTD)は主に前頭葉と側頭葉を中心に神経細胞の脱落を来たす初老期の神経変性疾患である。FTD は日本における指定難病の 1 つであり、その他の認知症と比較しても人格変化や脱抑制的な言動、無為・自閉傾向、常同行為といった、いわゆる行動心理症状(以下、BPSD)の進行によって、本人の日常生活が全般的に阻害され、また家族や周囲の介助者が対応に難渋することが多い。FTD の薬物治療に関しては未だ世界的にも大規模なコンセンサスは得られておらず、根治的な治療薬や日本で適応となっている治療薬は存在しないため、各臨床医がそれぞれの臨床経験に従って薬物療法を選択しなければならないことが実際の臨床場面ではよく見られている。この中でメマンチンは、これまでに施行された２例の無作為化比較試験ではプラセボ群と比較してFTDの治療成績に有意差は認められなかった。しかし一方で、2016 年に行われた FTD の軽症例と中等症～重症例とを分けて検証した Pan らの研究では、メマンチンは FTD の中等症～重症例に対して各種精神神経系スコアの有意な改善を示した。今回我々はメマンチンの投与によって、自宅で問題となっていた脱抑制や無関心などの BPSD が、医療者の主観的評価からしても Neuropsychiatric Inventory スコアの減少という家族の客観的評価からしても改善したFTDの症例を２例経験した。長期的な認知機能に対する影響は今後の経過を追う必要はあるものの、FTD の BPSD に対してメマンチンが奏功し、患者の日常生活動作の改善や家族の介護負担の軽減に寄与したものと考えられた。なお発表に際しては個人が特定できないよう個人情報の保護に配慮し、口頭で本人及び家族に発表に関する同意を得た。また、発表者の開示すべき利益相反(COI)はない。